

ヒンドゥー教の祭礼行事に潜在する健康方略について

— ネパール催事暦の分析から —

金 田 英 子

Strategies for Keeping Health Observed in the Hindu Feasts :

Based on the Nepalese Calendar

Eiko KANEDA

Abstract

Hinduism is one of the oldest religions in the world. In this religion, there is no originator and no such services as baptism or conversion. Hindus are people who simply believe in many Hindu gods. Hinduism can be regarded as a naturally originated religion.

The Kingdom of Nepal, consisting of several tribes, has determined Hinduism as its national religion. In the Nepalese calendar, we can observe a lot of Hindu festivals.

Although Hindu culture has been examined from various scientific view points, there is few report on the details of the method or intention of its ceremonies. This paper tries to clarify the process and the purpose of these ceremonies and to consider their influence upon keeping healthy condition in the Hindu life.

The materials for this study are obtained from an on-the-spot investigation of a devout Nepalese Hindu couple who are living in Bhagloon village. A close look at their Hindu feast has revealed that the ceremonies are composed of four activities as the purification, worship of specific trees, fasting, and offering of food at the altar.

The following reflections are also observed behind the facts :

- (1) The purification is not only for showing respect to gods but at the same time for keeping themselves clean.
- (2) Worshipping some special trees is not merely believing in other appearances of their gods but also appreciation of medical effect from wild plants.

(3) Fasting is to show loyalty to gods. Also it has a good effect on intestinal disorders.

(4) Food, dedicated to gods for thanksgiving, gives at least minimum nourishment to people after the feast.

Thus we can conclude that Hindu people have established their method of keeping health partly in the framework of Hinduism.

はじめに

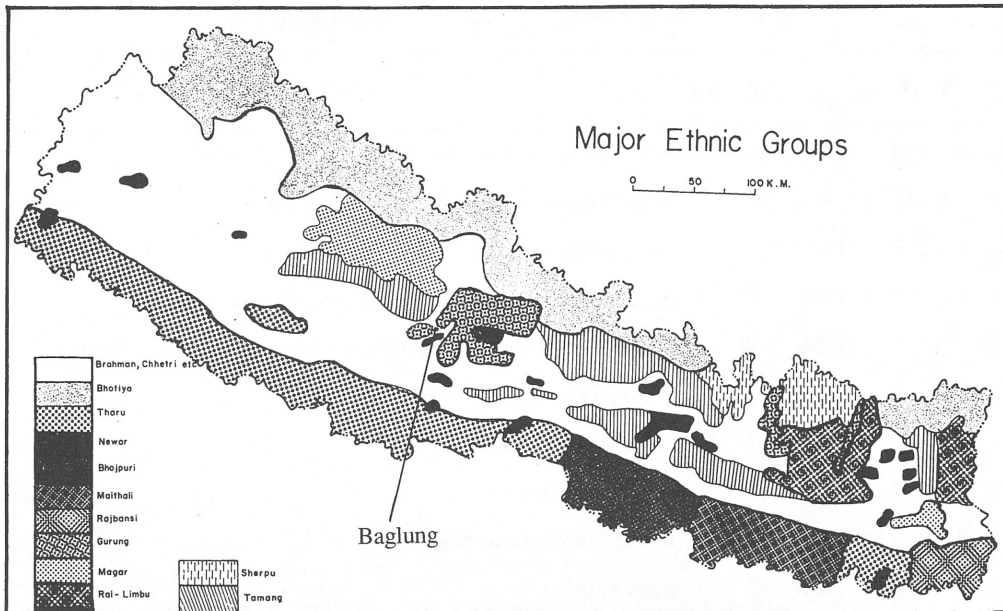
世界4大宗教の一つであるヒンドゥー教は、現存する最古の宗教の一つである。この宗教が特定の教祖によって開基されたものではなく、自然発生的宗教であるということは、ヒンドゥー (Hindu) という言葉そのものが、もともとペルシア人がシンドゥー (Sindhu) 河の対岸に住む非イスラーム教徒を呼ぶのに、誤ってヒンドゥーと発音されたことに由来していることから伺い知ることができる。したがってヒンドゥー教には今日でも中心となる人物は存在しないし、入信や改宗の儀式もない。ただその信徒が多数の神々を信ずる多神教の宗教で、土着の神々はもちろんのこと、仏教のブッタさえもヒンドゥー教の神に位置づけられている。このように開放的な思想は、異民族間の平和を保つためにあらゆる宗教を吸収しヒンドゥー教そのものを成長させてきた。そこにはしたがって自然発生的な古来の生活の知恵が随所に反映されているとも見られる。

ところで、ネパールは複数の民族が混在している多民族国家である。そのために、いくつかの宗教が混在し多様な文化を形成しているが、現在ではヒンドゥー教を国教と定めているため、暦の上ではヒンドゥー教神話にまつわる宗教行事が多く見受けられる。したがって必然的に社会習慣の中に、ヒンドゥー教の宗教的観念や儀礼が多分に取り込まれていることになる。

これまで日本でも、ヒンドゥー教については、その理念はもとより、神話を始め、数々の祭礼行事が報告されている。しかしそれらの多くは祭礼の部分的な概要にとどまっており、ヒンドゥー教の祭礼における各種宗教的行為の実際の手順詳細の記述、あるいはそれら行為の目的や意味についての論議にはあまり手がつけられていない。

そこで本稿では、まず最初に、ネパール王国のガンダギ県バグルン郡 (図1) 出身のチェットリ族¹⁾ 夫婦からの聞き取り調査に基づき、信徒の視点から、暦に記されたヒンドゥー教の祭礼行事のこの地方での慣行の全容を明らかにする。

さらにそれら儀式の諸行為が、結果的に生活における健康保持に果たす役割について吟味・検討した。



(‘NEPAL IN MAPS’ より)

図1 ネパールの民族構成と調査地 (Baglung 村)

I. 祭礼行事の概要—2052年（西暦1995年4月14日～1996年4月12日）の場合—

ヒンドゥー教の祭礼行事が1年を通して、どのように位置づけられているかの全容を明かにするために、本稿ではヴィクラム暦²⁾ 2052年（西暦1995年4月～1996年3月）の祭礼行事を例にし、調査が進められた。表1と対応させながら、それぞれの行事の特色を明かにしてみたい。なお本文中に、しばし触れられる、ヴィクラム暦の1～12月は表2に、黄道12宮³⁾は表3に示すとおりである。

1. nava barṣa/meṣa sakrānti/baiśākha sakrānti⁴⁾

ネパールでは、太陰暦の毎月初日、つまり sakrānti は神聖な日とされている。中でも、太陽が雄羊座を支配する日を meṣa sakrānti または baiśākha sakrānti とし、暦の上でも重視されている。

この baiśākha sakrānti からネパールでは、ヴィクラム暦の新年が始まる。

2. mātātirtha aumsī/āmāko mukha herne/baiśākha kṛṣṇapakṣa aumsī⁵⁾

baiśākha kṛṣṇapakṣa aumsī は別名「母の日」である。

この日、母親が喜び与えてくれた祝福は、息子や娘たちに大きな徳をもたらす。

3. akṣaya tṛtīya/baiśākha śukla tṛtīya

akṣaya tṛtīya は、暦の上での春のはじまりで、この頃大麦が実り、家に置かれる。宗教的慣習により、神に最初に贈与し、その後で人間が食べる決まりがある。

表1 ネパールの祭礼行事一覧(ヴィクラム暦2052年)

西暦	ヴィクラム暦	陰暦	曜日	行	事	名
1 4月14日	1月1日	白14	金	baiśakha	sakrānti/nava	barṣa
2 4月29日	1月16日	30	土	mātātirtha	aumsī/āmāko	mukha herne
3 5月2日	1月19日	白3	火	akṣaya	tṛtiya/paraśurāma	jayantī
4 6月9日	2月26日	白11	金	nirjala	ekādaśī	bratam/tulasi bija ropanam
5 7月9日	3月25日	白12	日	baiṣṇavānām	hariśayanī	ekādaśī bratam/tulsī ropanam
6 7月17日	4月1日	黒5	月	śrāvaṇa	samkrānti/luto	phālne
7 8月1日	4月16日	白5	火	nāgapañcamī	kalkī	jayantī
8 8月10日	4月25日	白14	木	raksā	bandhana	
9 8月17日	5月1日	黒7	木	kṛṣṇa	janmāṣṭamī	brata
10 8月26日	5月10日	30	土	kuśe	aumśī	
11 8月29日	5月13日	白3	火	tija	haritālikā	
12 8月30日	5月14日	白4	水	gaṇeśa	catulthī	
13 8月30日	5月14日	白4	水	ṛṣi	pañcamī	brata
14 9月9日	5月24日	白15	土	pratipadā	śrāddha	
15 9月25日	6月15日	白1	月	gaṭasthāpanā	āśbina śukla	pakṣa pratipadā
10月1日	6月9日	白7	日	phūlapātī		
10月3日	6月17日	白10	月	bijaya	daśamī	
10月7日	6月21日	白14	土	kojāgrata	bratam	
16 10月22日	7月5日	黒13	日	dhanbantari	jayantī/kāgatihāra	
10月23日	7月6日	黒14	月	lakṣmī	pūjā dipāvali/kukura	tihāra
10月24日	7月7日	30	火	gāipūjā		
10月25日	7月8日	白1	水	bhāi	ṭikā/govardhana	pūjā
17 11月3日	7月17日	白11	金	harivodhanī	ekādaśī/tulasi	bibāha
18 12月6日	8月20日	白15	水	dhānya	pūrṇumā	bratam
19 1月15日	10月1日	黒10	月	māghe	samkranti	(9日は欠日)
20 1月25日	10月11日	白5	木	śrīpañcamī	sarasvatī	jayantī
21 2月17日	11月5日	黒13	土	mahāśivarātri		
22 3月5日	11月22日	白15	火	phāgu	pūrṇumā/holi	punhi
23 3月27日	12月14日	白8	水	caitra	daśaim	
24 3月28日	12月15日	白15	木	rāmanavami	brata	

注) 祭礼行事の呼称は1つに限られないが、ここではカレンダーに記載されている呼称を優先した。

表2 ヴイクラム暦の12周期

ヴィクラム暦	bikram sambat	太陽暦 (isabi san)
正月	baisākha	4～5月
第2月	jaṭha	5～6月
第3月	asāra	6～7月
第4月	sāuna	7～8月
第5月	bhaḍhau	8～9月
第6月	asoja	9～10月
第7月	kārtik	10～11月
第8月	mamsira	11～12月
第9月	pusa	12～1月
第10月	māgha	1～2月
第11月	phāguna	2～3月
第12月	caitra	3～4月

表3 黄道12宮

呼 称		意 味	現在の漢名
メーシャ	meṣa	雄羊	白羊宮
ヴリシャン	bṛṣa	雄牛	金牛宮
ミトゥナ	mithuna	男女	双子宮
カルカ	karkada	蟹	巨蟹宮
シンハ	siha	獅子	獅子宮
カニヤー	kanyā	処女	処女宮
トゥラ	tulā	てんびん	天秤宮
ヴリシュチカ	bṛścika	さそり	天蠍宮
ダヌス	dhanu	弓	人馬宮
マカラ	makara	わに	磨羯宮
クンバ	kumbha	瓶	宝瓶宮
ミーナ	mina	魚	双鱼宮

贈与したものは、次の誕生で得ることができるという宗教的信頼があるので、バフィン⁶⁾に大麦を贈与する習慣がある。

baisākha 月は、贈与することがよい月とされている。baisākha 月と kārtik 月は、昼夜の長さがほぼ等しくなるので、その時に贈与するとよいと言われている。

4. nirjalā ekādaśī/tulasiko viu ropane/jeṣṭha śuklapaksa ekādaśī⁷⁾

ヒンドゥー教徒はこの日を特別なエカダシーの断食としている。1年に24回のエカダシーがあるが、この日は一番大きなエカダシーなので、一番大きな善果が得られると信じられている。この日断食をする者は、1年中のエカダシーの善果が得られるといわれている。

また、この日はトゥルシー⁸⁾の種を植えなければならない。トゥルシーはヴィシュヌ神⁹⁾の化身とされている。

5. ṭhūlo ekādaśī/hariśayanī ekādaśī/asār śukla ekādaśī

女性は沐浴をし、断食をする。そしてトゥルシーにプージャ¹⁰⁾をする。

また、この4カ月間 (sāun, bhaḍhau, asoj, kārtik) は結婚式を挙げてはならないが、それはこのような物語に由来する。

この日は、バリ王の王宮にヴィシュヌ神が寝に行かれた日である。ヴィシュヌ神は、śamkhāśura という鬼と戦い、asār śukla ekādaśī の日に鬼を殺したが、その時非常に疲れた。そこでこの日から寝て、kārtik 月の śukla ekādaśī の日に起きたので、この4カ月間、いかなる祝い事も行ってはならない。

通常は1週月に24回エカダシーがあるが、特別な年は、26回エカダシーがある。それらのエカダシーの中で、chātumasi bratārambha (4カ月断食) の初まりとなる asār śukla の hariśayanī ekādaśī と、その断食が終わる kārtik śukla の harivodhanī ekādaśī を「ṭhūlo ekādaśī (トゥーロー・エカダシー)」といい、特に重要視している。

6. sāune samkrānti/śrāvaṇa samkrānti/luto phālne

この日、太陽が蟹座を支配する。

この頃、一般にすべての山岳地帯の農夫たちは、自分たちの土地の田畑にイネやヒエを植え終わる。田植えや畑仕事をする際、雨が降ったりして泥々になるため、細菌が体に宿り、ついには皮膚の病気、村の言葉でルト (一種の皮膚が痒くなり、移る病気) と言うものに侵される。その病気は、kamḍāraka 魔王の力で生じるといわれている。

7. nāgapañcamī/śrāvaṇa śuklapamcamī

ナーグ¹¹⁾を祭る。そうすると、蛇の災難に合わず、家族は幸福で平和になると信じられている。

8. janai pūrṇimā/rakṣṣ bandhana/śrāvaṇa śukla

janai pūrṇimā の日、バフンやチェットリたちは、年中身につけているザナイ (聖紐)¹²⁾を、ウコンで黄色に染め、真言 (マントラ) を唱えながらプージャをする。

またこの日、バフンが、右手にプージャをした紐を結びつけてくれる。紐を結ぶ理由は、人生が無病で長いものであるようにというものである。

janai pūrṇimā に結んだ紐は、ティハールの日¹³⁾(2カ月半後)に、雌牛にプージャをして尻尾に結ぶと、死後天国に行けるといわれている。

9. kṛṣṇa janmāṣṭamī

この日は、ヴィシュヌの化身であるクリシュナ神が誕生した日なので、kṛṣṇa janmāṣṭamī と言う(表4)。

表4 ヴィシュヌの化身

化 身 名	時	場 所 (誕生)
1 魚	昼	クルタマール川の付近
2 亀	夕刻	海
3 野猪	昼	バラハ地域(ネパールのコシー川付近)
4 人獅子	夕刻	ムルスターン(インド)
5 矮人	昼	プラヨグラース
6 パラシュ・ラーマ	昼	ザムニヤ村(インド)
7 ラーマ	昼	アヨーディヤ(インド)
8 クリシュナ	深夜0時	マトゥラー(インド)
9 ブッダ	夕刻	ルンビニ(ネパール)
10 カルキ	夕刻	サンマラガウン

10. kuśe aumśī

kuśe というのは、ヴィシュヌ神の別の姿、クシャ草である。

11. tīja/bhadau mahināko śuklapakṣa tṛtīyā

この行事には、次のような物語がある。

ヒマラヤの娘、パルバティー¹⁴⁾に、実父がヴィシュヌ神を結婚相手にと考えた。しかしパルバティーはシバ(マハデブ)¹⁵⁾が好きだったので、マハデブと結婚できませんようにと、ティーズの断食をし、マハデブにプージャをした。後にマハデブは喜び、パルバティーはマハデブと結婚をした。それゆえに、女性たちはマハデブのような夫が得られるようにと、この断食をする。

12. gaṇeśa caturth/bhadau śukla catulthī¹⁶⁾

ガネーシャ神にプージャをする。gaṇeśa caturth のプージャには芝を忘れてはならない。なぜならばガネーシャ神は、芝が好きだからだ。芝を用い10回プージャをし、そして10個のロッドゥー¹⁷⁾を贈与する。そうすると10個の罪が消滅すると言われる。また、この日は月を見てはならない。見るとよくないと言われている。

13. ṛṣi pañcamī/bhadau śukla pamcahī

この日は女性は断食をすると、月経中の不浄¹⁸⁾に関する罪が消滅すると信じられている。

この行事には次のような物語がある。

黄金時代¹⁹⁾、ある国に非常に頭脳明晰なバフンがいた。妻はある日、月経中であったが家事が忙しかったので気づかなかった。月経中には夫に食事を作り差し出してはならなかったが、気づかなかったので、その夫婦はバフンとして不浄の罪を犯してしまった。そして次に生まれた時、彼らは雌犬と雄牛になって生まれた。このことを彼らの息子は知っていた。それ故、ṛṣi pañcamīの断食をし、両親を雌犬や雄牛から解放し、天国へと送った。

14. sohar śrāddharāmya

先祖供養。亡くなった自分の父母のサラドゥ（プージャ）を年に2回行う。

1回は死亡したその日のティティに、サラドゥ（プージャ）をする。

もう1回は、この日から16日間の中で、その死亡した当該ティティにプージャをしなければならない。

15. daśamī²⁰⁾

ヒンドゥー教最大の祭りの1つ。daśamīには「10」の意味があることから、この祭りは、10日間の祭あるいは10日目の祭りとされ、祭りは10日目に最高潮に達する。しかし実際にはこの一連の祭りは15日間続く。悪に対する善の勝利を祝うものでもあるが、ネパールや東インドでは、水牛の悪魔に対するドゥルガー女神の勝利を祝い、またインドの他の地域では、魔王ラーヴァナに対するラーマ神の勝利を祝うなど、地域によりその特色を異にしている。

16. dīpāvalī/kārtika kṛṣṇa amāvastha²¹⁾

灯火の祭典（ディワリー）は、ダサインと並んで重要な祭りとされており、5日間続く。

富の女神であるラクシュミーもディワリーで拝まれる。ほとんどの家庭で女神を迎えるために、ランプが、一晩中ともされる。

17. tulasī bibāha/kārtika śukla ekādaśī/ṭhūlo ekadaśī

kārtika śukla ekādaśīの日は、トゥルシー・ビバハの祝賀祭をする。

トゥルシーの種をヒンドゥー教徒は、聖なる河のように神聖でプージャをするにふさわしい物とし、重要視している。さらに必要なのはトゥルシーに浸された水である²²⁾。

ヴィシュヌ神はトゥルシーを妻の姿とみなしているので、女性たちはこれを非常に幸運をもたらすものと確信し、幸運を得るためにプージャをする。

asār śukla ekādaśī に眠りについたヴィシュヌ神²³⁾は、4カ月後にあたるこの日に目覚める。

18. dhānya pūrṇumā bratam/mārga mamgsira śukla pūrṇimā

この日、田畑に行き、‘ディワーリー’プージャをする。イネ、トウモロコシ、大麦を植えた場所は、ディワーリー神の加護で穀物となった。したがって自分が食べる前に、守ってくれた神に捧げ（食べさせ）なければならないという習慣がある。そのようにしなければ、神は怒り、翌年、穀物は実らないと言われている。

19. mādhe samkrānti/makara samkrānti

太陽がわに宮を支配するその日、mādhe samkrānti となる。samkrānti は毎月あるが、わに宮と蟹宮の samkrānti は特に重要である。この2つの samkrānti は、半年ずつの計算である。

mādhe samkrānti (mādhe 1日) から、太陽は北の方へ移動し始める。さらに蟹宮 samkrānti (sāvana 1日) から、太陽は南の方へ移動し始める。太陽が北の方に位置している時は、日中が長くなり、夜が短くなる。南の方に位置している時は、夜が長くなり、日中が短くなる。この夜が長い日にクリシュナは生を受け yaśoda (クリシュナの母、マハバーラータのクリシュナ) は断食をした。それぞれの samkrānti (12 samkrānti) の日をヒンドゥー教徒は聖なる日としている。

20. śrī pamcamī/basanta pamcamī/māgha sukla pamcamī/sarasvatī jayantī

サラスヴァティー神²⁴⁾の誕生日。

21. mahāśivarātrī/phalguṇa kṛṣṇa catuldaśī

シバ神創造（作られた、または誕生したとき）が夜だったので、その名前から śivarātrī となった²⁵⁾。

この祭りは毎年、phalguṇa kṛṣṇa catuldaśī の日に行われる。phalguṇa 月は寒季2カ月の中の後半の月に相当する。マハデブが世界を守り続けているので、弱りかけた植物、あるいは落葉した木々は、マハデブのシバタトゥワ²⁶⁾、つまり繁栄させるタトゥワで再び甦えさせることができ、新しい葉が出始めた。このように古い葉が落ち、新しい葉が芽生える月なので、phalguṇa 月にはこの śivarātrī が行われる。

22. phāgu pūrṇumā/phāgu śukla pūrṇimā/holi

phāgu śukla pamca aṣṭamī から pūrṇimā まで祝う phāgu 大祭（ホーリー）。この大祭は、ネパールのタライや山岳地帯²⁷⁾で行う。この日からホーリー祭が始まるので、村々、町々、集落集落の、小さな子どもから年寄りまで、友だちたちにアビール粉²⁸⁾を投げかけし、満月まで遊ぶ。

この祭りを何故行うのか、さらにこの祭りの重要さについて語った様々な物語が

ある。例えば、ある物語はこのように伝えている。古代 *hiranyakaśyapa* の名をもった悪魔（鬼）王は、自分の息子の *plahalāda* に神の力があることを怒り、殺害するために自分の妹であるホーリー（火に燃えない力を王から得ていた）に息子を殺させる。毒を食べさせ、蛇に咬ませ、山から突き落としたりさせた。しかし息子には神の力があるので何ともなかった。が妹の方は、炎で灰になってしまった。火に燃えない力を持っていても火で灰になり死んだ。そうしてこの時からホーリーの火は私達のものとなった。

23. *caitra daśaim/caitra śukla aṣṭamī*

caitra śukla aṣṭamī は、*caitra daśaim* 祭である。ヒンドゥー教では年2回、ダサインをする。

1回目は秋、*asoja*²⁹⁾ で、もう1回目は春の *caitra* 月である。この日はドゥルガー女神³⁰⁾ が誕生した日である。したがってこの日ドゥルガー女神のプージャをし、祭りをする、病氣、悲しみ、死から逃れ、幸せになると信じられている。

24. *rāmanavamī/śaitra śukla navamī*

rāmanavamī は、ラーマ神³¹⁾ の誕生祭のことである。ラーマは、*śaitra* 月の *śuklapaksa* の *navamī* (12月白分第9日目) に生まれ、ヴィシュヌの化身とされている。寺院では、一晩中プージャをし、ラーマ神賛歌をうたう人で賑わう。

以上、ヒンドゥー教の祭礼行事の概要について述べてきた。

これらの祭りの全容からヒンドゥー教の祭礼行事は、多くは次のような機会に設けられていると言えよう。

- (1) *sakrānti* や *ekadaśī* など、黄道の移行、特定の *thiti* あるいは季節の区切り目といった天体に関わりのある時。
- (2) 神の誕生日。
- (3) 特定の神（化身や使者をも含む）に祝福や感謝、祈願をする場合。
- (4) 人体の浄化もしくは断食。
- (5) その他（先祖供養、カーストに関わるものなど）。

これらは、伝承されている数々の神話に基づくものが多いが、その際、1つの祭りに対して異なった内容の神話がいくつも報告されることがしばしばある。

さらにこれらの特徴に基づき、年間の祭礼行事を表してみると表5のような結果になる。多くは1つの祭りにいくつかの要素が重なりあっているため、この分類基準は必ずしも厳密なものではない。しかしながらこの表から、神の誕生祭は冬から春にかけて多く、長期にわたる祭日は秋に集中していることがうかがえる。また、全体的には、数日間続く祭りを除いては月に偏りがなく、年間を通じ何らかの祭事が行われることになる。

表5 月別に見る祭礼行事とその分類

日 月	(太陽暦)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32		
1	4~5	1														5	2																		
2	5~6																								4										
3	6~7																							4											
4	7~8	1														3							5												
5	8~9	1									3	4	$\frac{3}{4}$										5												
6	9~10										3											5													
7	10~11			3													3																		
8	11~12																					3													
9	12~1																																		
10	1~2	1									2																								
11	2~3				2																		3												
12	3~4																2	2																	

< 1 = 黄道の移行、2 = 神の誕生日、3 = 特定の神（化身や使者をも含む）に祝福や感謝、祈願、4 = 人体の浄化もしくは断食、5 = その他 >

II. 祭礼行事の慣行

これまでヒンドゥー教の祭礼行事について、ヴィクラム暦2052年（1995年4月～1996年3月）の暦を例にとりながら、その全容を概観してきた。そこで次に聞き取り調査をもとに、それらの諸行事ではどのような物が儀式の際に必要なとされているのかを明かにするとともに、信徒の間で儀礼が実際に、どのようにな手順で執り行われているか、前項と同様にヴィクラム暦1月から順を追って明かにしてみよう。

1. nava barṣa/meṣa sakrānti/baiśākha sakrānti

この日、早朝に沐浴をし、清掃をして、清潔な服を着る。そしていろいろな女神・神を参拝し、プージャなどを行う。断食をする人もいる。

2. mātātīrtha aumsī/āmāko mukha herne/baiśākha kṛṣṇapakṣa aumsī

この日、息子や娘たちは母親に美味しい食べ物を食べさせ、喜ばせなければならない。

もし、母親がすでに亡くなってしまっている場合は、mātātīrtha の名の聖地（カトマンドゥーにある）、あるいはその他の聖地（例えばカーリーガンダギ川の岸辺、またはセーティーガンダギ川の岸辺、ガンダギ川の側の寺院³²⁾へ行き、沐浴をしプージャをした後で、パフンに、あるいは聖者に、米、ダル³³⁾、ギー³⁴⁾、ジャガイモ、野菜、塩、ウコン、香辛料などを与える。そして牛乳で少量の米をたいて、

その中に蜂蜜、ギー、バナナなどを混ぜ、米を団子にして、河の側へ行き流す。そうすれば天国の母親が、それを得ることができると信じられている。

3. akṣaya tṛtīya/baiśākha śukla tṛtīya

この日はガンガー³⁵⁾へ行き沐浴をし、ヴィシュヌ神の化身であるクリシュナ神が祀られている寺院または家で、クリシュナの神像あるいは写真に、ジャクダンと大麦でプージャをする。そうしてバフンにも大麦を贈与する。

akṣaya tṛtīya は、春が終わり、暑い季節が初まる頃である。太陽の日差しで、体の熱が上昇し水を飲みたくなる。そのために体は乾いたように感じる。そのようなときジャクダンでプージャをし、額にティカ³⁶⁾をつけると、体は涼しくなる。

大麦はクリシュナの別の姿とされている。したがって、このように過ごし、プージャをすると幸運になると言われている。また大麦粉は体の多くの病をよくする。

4. nirjalā ekādaśī/tulasiko viu ropane/jeṣṭha śuklapakṣa ekādaśī

ヒンドゥー教徒は特別なエカダシーの断食としている。サスツラ（古文書）では、エカダシーの断食をする者は、無病で長寿であると言われている。この日は穀物を食べてはならない。しかし、病人や虚弱者は牛乳や果物を食べてもよい。

この日、日の出から日没まで水さえ飲んではならないという決まりがある。jeṣṭha 月は暑いので、水分を多くとらなければならない。しかしこの日は、水を飲んではならないという決まりを作ったのは、信徒たちの忍耐力を高めるためである。この日プージャをし、穀物、布、傘、果物を与える習慣がある。プージャと供えが終わった後で、トゥルシーの種を、鉢又は畑に植えなければならない。（この日、他の花の種も植える。）トゥルシーはヴィシュヌ神の別の姿とされている。

5. ṭhūlo ekādaśī/hariśayanī ekādaśī/asār śukla ekādaśī

この日、ヒンドゥー教徒の女性は、早朝に起きて沐浴をする。ある人は果物だけを食べ、ある人は水だけを飲んで断食をする。そしてトゥルシーのプージャをする。asār 月に種を植え、そしてkārtik 月のekādaśīに結婚をする。次のドウワダシーの日、トゥルシーと共にヴィシュヌ神に、祭火の供犠（火を焚き、ギーに、米、大麦、ゴマを混ぜ、火に入れてプージャをする）を執り行い、プージャをする。

宗教聖典では、トゥルシーを植えた家は、ティルタ（＝聖なる場所）に相当すると宗教的重要性を示している。ティルタには、「トゥルシーで、せきなどの病気を治す。」「その時々、断食をしお腹を休めるので消化力を高めることを助長する。」といった意味も込められている。

6. sāune samkrānti/śrāvaṇa samkrānti/luto phālne

この日、夕刻、暗くなる頃に、それぞれの家の前の中庭でkamḍāraka 魔王のプージャをする。その際、果物、線香、供物でプージャをする。またプージャをす

るとき、森林にある、kuvigāḍo、panisato、とうきび、sirū（これは全部森や公園にある植木の名）や siuḍī（一種のトゲのあるサボテン）が必ず必要である。火を焚き、プージャをしながらギーを入れて上述した植物などを燃やすので、その煙で、皮膚の痒くなる病気が治ると信じられているし、実際にその効用も認められている。プージャをし終わった後、家の4方角（東、西、北、南）に煙と共に、「(ルト) 痒くなる病気、行け、kamḍāraka 魔王！」と言いながら投げ捨てる風習がある。すべての方角に投げ捨てた後、pāte siuḍī を家の出入口の上に置く。このようにすると、出入口からそれらの病気が中に入ることができないと信じられている。

また、プージャをする際、供物にマース（インゲン豆の一種）を砕き、パカウディ（天ぷら）を作り、kamḍāraka 魔王にプージャをすると、喜ぶと言われている。

さらに sāune 月の間中、キール（ミルクに米、砂糖を混ぜて焚いたもの）を食べる習慣がある。そうすると、体が強くなりそして皮膚の病気にならないと言う風聞がある。

7. nāgapañcamī/śrāvaṇa śuklapamcamī

この日、銀、金、木または土のナーグを、家の近くに作り、karabira、śatapatra、蓮の花、pāti、よい香りのする線香、ミルク、綿の輪、シンドゥール³⁷⁾、大麦、ゴマ、米を炒ったもの（炒米）でプージャをする。と同時に、ミルクとミルクで作った食べ物でプージャをしなければならない。ナーグは、よい香りのする線香と花、さらにミルクが大好きである。

家では、12ナーグ（表6）を各月ごとに作った紙にプージャをし、戸口の上に牛の糞で貼りつける³⁸⁾。

このようにすると、ナーグは信徒に苦しみを与えないし、家は幸福で平和になると信じられている。

表6 12ナーグの名称

1 ananta	2 bāsuki	3 šeṣe	4 pajha
5 kamvala	6 karkoṭaka	7 aśvatara	8 dhartarāṣṭr
9 śamkhapāla	10 kariya	11 taksaka	12 rapimgala

8. janai pūrṇimā/rakṣṣ bandhana/śrāvaṇa śukla

バフンが手に紐を結んだ後、バフンに食事のため供物（米、ダル、塩、ギー、タルカリー、ウコンなど）を与えなければならない。

紐をウコンで染める理由は、ウコンの芳香が、病をよくすると言い伝えられているからである。

9. kṛṣṇa janmāṣṭamī

この日、信徒はみな断食（果物以外、何も食べない）で過ごし、沐浴をした後、夕刻からクリシュナ寺院へ行き、あるいは家でクリシュナ神の写真にプージャをし、そして賛歌をうたい、一晩中プージャをする。

プージャをしながらクリシュナ神の母、デワキを寝具に寝かせた状態を作り、夜中の12時、クリシュナが生まれた時刻までプージャをする。なぜならば、クリシュナ誕生の際には陣痛が起きる。それが痛まないようにとプージャをする。

プージャをする際、花、供え物としての果物、例えばバナナ、みかん、リンゴなどを置く。そうしてアビール、大麦、ゴマ、線香、灯明、パンチャアムリット（＝雌牛のミルク、ヨーグルト、ギー、蜂蜜、砂糖の5品を混ぜたもの）が必要となる。さらにパンチャアムリットを、断食しているもので必ず食べる。

牛乳、ヨーグルト、ギーを用いるのには次のような理由がある。

牛乳；牛乳には多々よいところがある。例えば、香りがよい、冷たい、まろやか、ギーになったものは油っぽい、こくがあるなどである。寿命が延び、力、知恵が増える。

ヨーグルト；食欲が増す。力がわく。精力が増す。能力が高まる。そしてお腹のために大変よい。

ギー；牛のギーで、知識、記憶力を高め、疲れをとる。声をよくする。力を増やす。視力を高める。

牛の尿；これで咳を止める。胆嚢の病をよくする。手や足の関節の痛みを治す。蕁麻疹をおさえる。お腹の多くの病気を治す。風邪を治し咳を止める。下痢を止める。

10. kuśe aumśī

バフンが、クシャ草を切ってプージャをする。家に持ち込んだ後、バフンにティカをつけ、賽銭をし、そしてクシャ草を家の中に置く。1年間このクシャ草にプージャをしなければならない。

プージャをする際、クシャ草で、薬指に指輪のようなものを作り、はめ（＝クシャ指輪）、プージャをすると、幸運と良いことがあると信じられている³⁹⁾。

11. tīja/bhadau mahināko śuklapaksa tṛtiyā

朝、沐浴をし、何も食べないで断食をし、新しい赤い服を着て、すべての装身具を身につける。そして家でガンガー岸の砂などを置いて、プージャをする場所を作り、シバとパルパティーのリング⁴⁰⁾を作り、プージャをする。

プージャの際に必要なものは、大麦、ゴマ、ピャクダン、アチェター（米を水に浸し、そして赤いパーン⁴¹⁾を混ぜて作る）、ココナッツ、スパリ⁴²⁾、レモン、季節

の果物、布、線香、灯明で、夕刻にプージャをし、そしてプージャをした灯火を一晩中つける。翌日、バフンにティカをつけ、賽銭をし、食事を与えた後、プージャをしたすべてのものをガンガーに流し、やっとな食事をするといった習慣がある。

ヒンドゥー教では、この日食事をした女性は、恐ろしい罪を受け、そして再び生まれる時もよくないとされている。もし、この日、何かを食べると自分の夫の寿命が縮み、さらに水を飲むと、夫の血を飲んだと同じことになる水さえ飲まない。

12. gaṇeśa catulthī/bhadau śukla catulthī

ガネッシュの神像を作り、プージャをしなければならない。21個の黒ゴマのロッドゥー、緑の芝を21本手にし、ガネッシュの10の名(表7)を呼び、プージャをしなければならない。そしてさらに、それぞれ2本ずつ芝をそろえてプージャをしながら、大麦、ごま、うこん、線香、アビール、シンドゥル、スパリ、聖紐、白い布、パンチャカビヤ(牛の尿にミルク、ギー、牛糞、ヨーグルトを混ぜたもの)、パンチャムリット(牛乳、ヨーグルト、ギー、蜂蜜、砂糖を混ぜたもの)を供える。プージャをし終えたら、10個のロッドゥーとその他のものをバフンに与え、そして残り10個のロッドゥーを自分で食べなければならない。

表7 ガネーシャ10の名

1 gaṇādhipāya	2 umāputraya	3 aghanāśanāya
4 binākāyā	5 īsaputraya	6 sarvasiddhaprarāyā
7 ekadantaya	8 ibhavaktraya	9 mūṣikabāhanāya
10 kumāraśurabe		

13. ṛṣi pañcamī/bhadau śukla pamcahī

この日、ヒンドゥー教徒の女性たちは、早朝起きて、河へ行き365本のブラシ⁴³⁾で歯を磨く(それぞれ合わせたもので108回ずつ磨く)。そしてさらに午後7時にトゥルシーのプージャをする。このように、パンチャミーの断食をした者は、女性の月経中の不浄に関する罪が消滅すると信じられている。

14. sohar śrāddharāmya

サラドゥーでは、ミルクで作ったお米の団子を、各月1塊の計算で作り、牛に食べさせる。牛が食べると、死者が食べ物を得ることができると信じられている。

この16日間は、魚、肉、たまねぎ、ニンニクを食べてはならない。さらに性的交わりをしてはならない。

15. daśamī

(1) gaṭasthāpanā/āśbina śukla pratipadā

ダサインの第1日目を、gaṭasthāpanāまたは9日夜の第1日目としている。このāśbina śukla pratipaga (第1日目)と、caitra月 śukla pratipagaの年2回は、特別な日とされている。この日、早朝に起き、家の土塗りをしてガトを作る。ガトと言うのは、水瓶のことである。水は、バルン神の他の姿とされている。バルン神をヴェーダ⁴⁴⁾では東縛から解放する神としている。ゆえにそれぞれの幸福を阻害するものを取り除くために、バルン神にプージャをする必要がある。

この日、早朝に起き沐浴をしマッサージをして⁴⁵⁾、身体を清めた後、ガンガーから水と土を持ち帰り、プージャの部屋で神聖な土と砂をタパラ(葉で作った皿)または土で作った容器に入れ、それにダサインでは絶対に欠かすことのできない“ザマラ”がはえる大麦⁴⁶⁾とトウモロコシを混ぜてザマラを作る。

その後、kuladevīとドゥルガー⁴⁷⁾の神像を置き、プージャをする。ドゥルガーのプージャをする場所で、農機具や刀などのプージャをする習慣がある(写真1)。



写真1 ダサインの祭壇

この日からサクティー(女神)のプージャをいろいろな寺院へ行って行う。9日目まで深夜に起きて、沐浴をし(可能であるならば、毎日一つ一つの聖地で沐浴をし)、そしていろいろな女神(例えば、ソウラプトゥリ、バハンツァリニ、ツァンドラダタ、クスマンダ、スカンダマター、カンタヤニー、カールラットリー、マハゴリー、シッディラトリーの9つがあるが、毎日それぞれ1つずつプージャをしなければならない)にプージャをすると同時に、ドゥルガー神のプージャをしなければならない。

(2) *phūlapātī/āśbina śukla saptamī*

ācbina śukla saptamī (7日目)の日から、ダサインの特別な祭りが始まる。*saptamī*の日、フルパティーを持ってくる日で、果物、ベールの葉など、バストゥ神をプージャする場所に持ってくる。このフルパティーは、それぞれの家や、村の神々の寺院を作った場所、^は“堡”から、家々の中へ持ち込む。

(3) *daśamī*

*mahāaśṭamī*⁴⁹⁾と*mahānavamī/ācbina śukla aśṭamī*と*navamī*

8日目から女神の寺院ではボカ⁴⁹⁾を切って、供物を捧げる。

*ācbina śukla aśṭamī*と*navamī*の日、‘ドゥルガー神’の特別なプージャをする。この日、各地域のバグワティー寺院や^は堡⁵⁰⁾でドゥルガー神の特別なプージャをする。そして家々では、アヒル、ニワトリ、雄水牛、雄山羊などの供物を捧げ、プージャをする。この日、マハカーリー⁵¹⁾、ラクシュミー⁵²⁾、サラスヴァティーや、自分の家々にある刃物や武器(銃、ピストル、刀、ナイフなど戦いの武器)、イネ、米、そしてお金にもプージャをする。

アスタミーとノワミーの間の夜は、*kālarātri* (暗黒夜)⁵³⁾と言う。この日は夜でも、アヒル、ニワトリ、雄山羊など供物を捧げ、神を喜ばせるプージャをする。

bijaya daśamī/āśbina śukla daśamī

ダサインの非常に重要な日々である最終日を‘ビジャエ・ダサミー’またはティカの日とされている。この日、ドゥルガーおよびその他の女神の最後のプージャをし、最初の日に作った瓶の水を儀式に使い、神の花輪(花)を首にかけ、ティカをつける。

このような順序で、尊敬すべき家長が自分よりも小さい者に、祝福する形でティカとザマラをつける。この日、ティカをつけに来ることができない場合は、満月の日、ティカをつけなければならない。このような方法で、人々は自分の家でティカをつけた後で、自分の親戚たちや尊敬すべき人たちのところへダサインのために準備して置いている特別な服を着て、ティカをつけるに行く。こように、ティカをつけて歩くといったことを*ācbina śukla pūrṇimā*まで行う。そしてプルニマが楽しい‘ダサイン’祭の最後となる。

10日目はティカをつける最も重要な日である。この日ココナッツの汁を飲み、夜通しトランプをし、土の上に座ると、その家にはラクシュミーが宿り、大金が集まると言われている。

(4) *pūrṇimā/kojāgrata bratam/ācbina śukla pūrṇimā*

*ācbina śukla pūrṇimā*の日、最後のティカをつける日である。*pūrṇimā*はダサインの楽しい祭りの最後となる。この日は、クリシュナ寺院とヴィシュヌ寺

院へ行き、プージャをする。この日、何も穀物を摂取せずに、夜、満月の光に神を置き、牛乳（牛のみ）や牛乳のキールを用い、ラクシュミーとインドラ⁵⁴のプージャをしなければならない。この日のような月浴は、いつの時もない。この季節（秋）は月光が美しく、月の光から聖水が出てくる。月光は、涼しさを与えるが、この日の月は、特別な涼しさを与える。それ故にこの日の月浴を経験した者はよいが、経験をしていない者は、神の供物のキールを食べ、その月浴を得なければならない。

満月の後、ザマラやティカなど儀式に使用したものをガンガーに流さなければならない。

16. dipāvali/kārtika kṛṣṇa amāvastha

(1) kāgatihāra/kāgavali⁵⁵)

ティハールの初日は、kāgatihāra、kārtika kṛṣṇa triyodaśīの日となる。

この日、早朝家の中庭に、プージャをする物を集める。そして美味しい食事を作り、カラスをアー、アーと言いながら呼び寄せ、カラスに作ったものを与え、食べさせる習慣がある。この日、カラスにプージャをしないで食事をする、災いが起きるとされている。カラスは閻魔大王の使者で、神のお告げの運搬役とされている。

(2) kukuratihāra/naraka caturdaśī⁵⁶)

ティハールの第2日目は、kukuratihāra、kārtika kṛṣṇa caturdaśīの日とされている。

この日、朝全員起きて、沐浴をし、ヤムラーズ⁵⁷のプージャをし、河々にドゥーナまたはタパリー⁵⁸の上に、蠟燭を灯して流す。そしてその後で、イヌのプージャをし、花輪をかけ、美味しい食べ物を与える。イヌはヤムラーズの使者で、バイラブ女神の乗り物とされていると同時に、家を守る存在とも言われている。

(3) gāitihāra/laksmī pūjā/kārtika kṛṣṇa amāvasyā/aūmsī⁵⁹)

ティハールの第3日目は「ガイティハール」と「ラクシュミープージャ」をする。この新月の日は、朝は飼育している牛に、さらに夜はラクシュミーのプージャをする。この日の朝、人々は牛をラクシュミー神の乗り物としてプージャをし、花輪をかける。そして、美味しい穀物の食べ物を与える。

ラクシュミープージャには、次のような物語がある。

ヴィシュヌ神の妻、ラクシュミーは、ヴィシュヌ神がチンサガル（下界または海底にチンサガルという場所がある）に眠っている時、鬼たちを非常に恐れ、蓮の花の中に隠れて寝ていた。それ故、ラクシュミーを起こすため、女性たちは家々に灯火を灯しプージャをする。ラクシュミーは自分の夫よりも12日早く起きるこ

とになる。そして夜ラクシュミーを起こし、自分の家に招待して食事をもてなす。そうするとその家は1年中、ラクシュミーが宿る（居座る）と信じられている。

プージャの夜、ラクシュミーは明るくない家には行かないというので、自分の家にラクシュミーが宿ることを祈願し、それぞれの家では、主婦たちは家の壁塗り⁶⁰⁾をする。そして家や家の周りを掃除し、灯火を灯す。家の周囲はティハールの初日から、ラクシュミープージャの日まで灯火をともし。ラクシュミープージャの日は、プージャをしながら灯した灯火を2日間消さないで灯し続けなければならない。

菜種油で家の周囲と家の中を灯す理由の1つは、掃除した後もなお残っている細菌を殺し、健康的な生活を営むためである。もう一つは、この日の夜、ラクシュミーが世界中をまわり、そして明るい家に宿ると信じられているからである。

家の中ではラクシュミーの神像や写真と共に、kuvera⁶¹⁾印を置き、プージャをする祭式場を作る（写真2）。そうして沢山の皿に香を焚き、お札、コイン、イネ、米、色々な果物、ロティー、花輪、数多く（=14種類）の食べ物を作り、ラクシュミーに捧げる。と同時にお金を入れる棚、穀物を置く bhakarī（器）にもプージャをする。この日、正午（午後0時）から、ラクシュミーを迎え入れる準備をする。それぞれの家では、自分たちの家の入口からラクシュミーのプージャをする場所まで道を示すため、足跡のように、ラクシュミーが足をつくだろう場所に印をつけ、その印の上にアチャタ、花、シンドゥール、果物を置く。

このラクシュミープージャの日、窓、扉、すべての場所に花輪を置く。そして沢山の呼び声の歌を歌いながらラクシュミーを呼び寄せる。ラクシュミーのプージャをし終えたら、ラクシュミーの花を供物として受け、宴会を行う。



写真2 ティハールの祭壇

ラクシュミーのプージャをし終えた後は、その日自分の持っているお金、あるいは財産を使用してはならない。使ったり、他人に与えたりすると、ラクシュミーは逃げてしまうといわれている。村ではラクシュミープージャの夕刻、夜に、バイローやデウシー（ある種の歌）を行うグループに与えるお金や食べ物を別のところにあらかじめ分けて置く。

ラクシュミーのプージャをする時に必要な物は、アビール、炒り米（米を炒って作る）、砕かれていない米、イネ、ヨーグルト、bimiro（一種の酸っぱいもの）、バナナ、大根、そしてロティーなどである。プージャをする際、ラクシュミーが黄色の服を着て、いろいろな種類の装身具を身につけ、巻き毛をし、亀の甲の上に座っている様を想い、そして真言（マントラ）を唱える。その後でいろいろな種類の食べ物を用いプージャをする。そしてラクシュミーのティカと花を自分の家族全員につける。

(4) govardhana pūjā/kartika śukla pratipadā/plathāmā

ティハールの4日目、kartika śukla pratipadāの日の朝、govardhana pūjāをする。そしてこの日の夜、盤上遊戯やトランプをする。

この日雄牛やバリ王のプージャをする。

(5) bhāi tīkā⁶²の儀式はティハールの最終日に行われる。この日、自分の姉妹の手から兄弟にティカをつける。自分の姉妹がいない場合は、他の人と姉妹関係を作っても‘バイティカ’の儀式を行う。この日、自分の兄をヤムラーズの、そして弟をチットラグプタの姿とみなし、プージャをする場所を作り、プージャをしなければならない。プージャをし終えた後で、供物を与え、食事を贈与する。さらにその後で口直しに、パーンヤスパリを与えなければならない。油が乾かない限り、クルミの水が乾かない限り、ヤムラーズとチットラグプタは兄弟姉妹たちを守り続ける。ゆえにバイティカの儀式を行うと、兄弟姉妹が1年間無病で幸福であるといわれている。

バイティカについて、次のような物語が語り継がれている。

ある時、寿命の終わりが近づいた1人の男を、ヤムドゥータとスワヤンヤムラーズが連れに来た。しかしその男の姉は、その日がバイティカの日だったので、ヤムラーズに‘バイティカ’をしない限り、弟を連れて行かないで下さいと頼んだ。その姉の願いどおり、ヤムラーズはバイティカの儀式を終えるまで待つことにした。姉は油を用い、クルミや果物を捧げ、ピンロウジュの花輪を弟にかけプージャをした。と同時にヤムラーズと、彼と共に来たヤムドゥータたちにも、もてなしをしプージャをした。その人の尊敬した歓待を見てヤムラーズは大変喜び、彼女の願い事の一つだけ聞き入れることにした。姉は「このような機会をお与え下さっ

でも、あなたたちは私の弟の魂を持っていこうとしています。なぜなら彼の寿命はすでに終わっているからです。彼を連れて行かないよう私は1つのことを願います。それは何かといいますと、今日、私が弟にプージャをしながら与えたクルミが乾かない限り、油が乾燥しない限り、さらに弟の首にかけたピンロウジュの花輪が枯れない限り、弟を連れて行かないで下さい。」と言った。この話を聞くと、ヤムラーズは勘違いをして、願い事を聞き入れることにした。このおかげで寿命を終えたはずの弟は連れていかれなかった。なぜならクルミは常に水をなくさないし、スバリの花で作った花輪は枯れない。同様に油も、常に乾かないものであった。それ故、バイティカは姉妹と兄弟のために幸福をもたらす儀式とされ、その際、油、クルミ、ピンロウジュで作った花輪は欠かせないものとされている。

17. tulasī bibāha/kārtika śukla ekādaśi/ṭhūlo ekadaśi

トゥルシーの功德は先述したようにたくさんある⁶³⁾。

kārtika śukla ekādaśi の日、ヴィシュヌ神の神像に生命を吹き込み、よい服を着て宝石を身につけ、楽器をならしてトゥルシーの種の近くで、共に彼らの結婚を祝う。

18. dhānya pūrṇamā bratam/mārga mamgsira śukla pūrṇimā

この dhānya pūrṇamā の日、山や村の家々では、小屋にプージャをする習慣がある。この日、新しいイネの米から作った、または古いイネの米から作った粉でロティー（パン）を作り“サイ・プージャ”を小屋でする。その後で、イネ、米、ヒエそしてトウモロコシを入れてある bhakarī⁶⁴⁾ にロティーを捧げる。そしてロティーの供物を自分でも食べる。このようにすると、1年間イネは無事貯蔵されるといわれている。

19. mādhe samkrānti/makara samkrānti

沐浴をし（体に油を塗って）、そしてゴマで作った食べ物を食べる（例えばゴマとベリーで作ったロッドウなど）。また、この日、キツリー（キルツォ）⁶⁵⁾ を食べなければならない。この食事は身体によく、病気にならないとされている。

mādhe samkrānti の頃は、寒季のはじまりなので、バフンに布（服）とゴマを捧げる者は功德があると言われている。なぜなら布（服）を着ると温かくなるし、ゴマで作った食べ物も体を温かくするからである。

20. śrī pamcamī/basanta pamcamī/māgha sukla pamcamī

この日から pamcamī の断食が開始される。妻において、māgha sukla pamcamī の日から6年間、毎月パンチャミーの日に断食をすると、その妻は幸福になり夫の愛が得られるという物語がある。

またこの日は、朝起きて沐浴をし、体を清潔にした後で、サラスヴァティーの寺

院または家でサラスヴァティーの写真にプージャをする。サラスヴァティー女神は、知識の神とされているので、この日、学校へ勉強に行く年齢の子どもたちは、サラスヴァティー神像の前に、本、ノート、ペン、そしてインクを置きプージャをする。

21. mahāśivarātri/phalguṇa kṛṣṇa catuldaśī

シバ神の夜祭はこのような方法で行われる。

他の祭りをを行う時と同様に、この日も朝全員起きて沐浴をし、シヴァ寺院へ行き、櫛、鏡などを用いプージャをする。そして真言を唱え（サンスクリットの本を読み）、禪をくみ、賛歌をうたう。

断食をしている人たちは、家々でプージャをする。śivarātriの夜、食事をしないで（果物や、何も入れない紅茶やミルクは食べてもよい）神の賛歌をうたい、夜4パヘル⁶⁶⁾に4種類のプージャをする。この日、断食をしている人は暗くなった時に1回だけ食事をすることができる。

シバ神のプージャをするとき、ダトゥラ⁶⁷⁾やベルの葉などを必ず用いなければならない。と同時に、大麦、ゴマ、ビャクダン、アチャッタ、花、ミルクでシバ神のリングにプージャをしなければならない。

śivarātriの日は夜、寝ずに供儀（イネ、米、ギーなどヴェーダ經典を唱えながら火に入れる）をすると、すべての幸福を得ることができ、罪が消失すると信じられている。

バルヴァティーがシバ神に、断食の中で最上の断食は何かと尋ねると、シバ神は、バルヴァティーに言った。断食の中で最上の断食はśivarātriの断食である。そしてこの日、清い心になり断食をすると、天国へ行くという話がプラナー文献に記されている。

22. phāgu pūrṇamā/phāgu śukla pūrṇimā/holi

この日からホーリー祭が始まる。山岳地帯よりもタライ地帯の方がこの祭りは雄大美しい形で行われる。村々、町々、集落集落の小さな子どもから年寄りまで、友だちにアピールを投げかけし、満月まで遊ぶ。さらにいろいろな種類の歌を歌う。この後で、満月の夜にプージャをする。プージャをした後で、火を焚きポロ布を燃やす。そしてホーリー祭は終わる。

aṣṭamīから、集落集落では子供たちが家々へ行き、薪をもらいポロ布を置いた場所を集める。薪を与えない、あるいは少しだけ与えた家へ行き盗んで持って来る風習がある。家に薪がない時は、薪を買うお金を与えなければならない。集落集落では薪を1カ所に集めた後で、1年中仲間との間に生じた仲違い、感情、敵意、さらに怒りをホーリーの火に燃やすという風習がある。周囲のすべての隣人が集まり焚き火をし、体を暖める。

phāgu pūrṇimā は冬が終わり春が始まる頃である。寒さから生じた諸々の病気、例えば風邪、咳、そして胸の病気などは、その日に燃やしている火の煙や火のぬくもりから回復する。歌を歌いながら胸に溜まっている咳などを出し、元気になる。またアビールをつけることで、皮膚病のもととなる細菌などが死ぬと言われている。

この時は金持ち、貧乏、上位カーストや下位カーストを区別することなく、男女ともみんな自由に着色粉をかけ合い、喜ぶ。

23. caitra daśaim/caitra śukla aṣṭamī

それぞれの場所にあるドゥルガー女神の寺院、村々の小屋や家でプージャをする。そして、アヒル、ニワトリ、水牛、ヤギ（ボカ）などの供物を捧げる。

24. rāmanavamī/śaitra śukla navamī

ラームナワミーの日は、断食（果物以外は何も食べない）をし、ラーマ神のプラティマ（神像または写真）にパンチャムリットで沐浴をさせプージャをしなければならない。

その夜は一晩中眠ってはならない。夜通しラーマ神賛歌をうたい、過ぎさなければならぬ。

このように、断食をしプージャをすると、罪が消滅し、願い事がかなうと信じられている。この日、食事をした人には大きな災いが起きる。そして死後、地獄に落ちると言われている。

また、この日は、プージャをし、キールを作りバファンに差し上げなければならない。

以上、祭礼行事が実際にどのような手順で行われているのかを上述してきたが、次項にてこれらの儀式の諸行為が、結果的に日常生活における健康保持にどのように関与しているかの検討を行うことにする。

Ⅲ. 考 察

ヒンドゥー教の祭礼行事では、ある種の物や行為が特別な意味を伴っていることが少なくない。そこでここでは、先に述べた祭礼行事の慣行の中で、それぞれ祭礼行事別に、儀式に必要なものとその行事において、健康法と関わりのある事柄を抽出した（表8）。この表から、すべての儀式にはプージャを伴っていることが容易に読みとれるが、このプージャを行うためにはまず最初に沐浴をしなければならない。さらに儀式には、ニワトリやボカなどの供犠をはじめ、パンチャムリットやキールなど特定の供物が必要とされたり、トゥルシー、ビャクダン、クシャ、ビンロウジュなどなど特定の植物が用いられなければならない。また、断食においても、一切のものを口に

してはならない場合、水だけは許される場合、水、果物、紅茶はよいとする場合など、いろいろな段階があり、それは儀式の内容によって異なってくる。これらのことを総括し、本稿では儀式形態の一部を、(1)沐浴、(2)植物崇拜⁶⁹⁾、(3)断食、(4)供犠・共食の4種類に大別し吟味した。以下、さらにそれらについて詳しく見てみよう。

(1) 沐浴

古代より世界各地では、沐浴は神聖なものに接する時に身を清める行為として行われてきた。ヒンドゥー教においては、ガンジス河などの聖水で沐浴すれば、罪や汚れがなくなると言われている。つまり沐浴は広義において人間と神との内面的交信をする上での1つの準備段階であり、聖なるものへの接近とみなすこともできる。

ところでプージャのための沐浴の際には、沐浴前とは同じ服を着用してはならないという習慣がある。これは身体と同様に、それまで着ていた服も不浄なものともみなされるからである。このように信仰に基づく沐浴は、結果的には衛生的な身体を保持することになり、皮膚病などの病気を未然に予防することになっていると言える。

(2) 植物崇拜

これまで述べてきた祭礼行事の中では、特定の植物は儀式に必要不可欠なものとして重要視されている。と同時に、そのほとんどが薬草の効用をも持ち合わせているが、この方面については、すでにかんがりの研究がなされている。そこで「ネパール・インドの聖なる植物」(八坂書房、1993)から、儀式に用いられる主な植物と、その効用を表9に示した。本書では、イネ、オオムギ、ゴマについての体への効果は特に記されていない。しかし、イネ、オオムギはネパール人の主食で活動力の源である。またゴマは前項の「祭礼行事の慣行」の中でも触れたように、「体を温かくする」という報告がある。

神または儀式との関係からこれらの植物について論ずる際、植物と特定の神との因果関係を明らかにすることは容易ではないが、オオムギやカミメボウキのように、植物を、完全に神の化身とみなすものと、神と何らかの関係があるものに分けて考えることは可能である。つまり前者は植物が神そのものである。したがってそれらの植物を用いるということは、神と一体化することによって、神の力を自分のものに転化させるといった行為がそこに生じると見なすこともできる。いっぽう後者は、植物に霊的な存在があったり、あるいは神を拘引する要素があるとみなすもので、神と人間とを結びつける媒介を担っていると言えよう。そうしていずれもそこには人間をこえた力をもつ存在への信仰が見られる。

表8 祭礼行事に必要な物と健康法に関わりのある諸行為

行 事 名	儀礼に特に必要なもの	健康に関する慣行
1 baiśākha sakrānti/nava barṣa		ブージャ, 断食
2 mātātirtha aumsī/āmāko mukha herne	米, ダル, ギー, ジャガイモ, 野菜, 塩, ウコン, 香辛料, 牛乳, 蜂蜜, バナナ	ブージャ
3 akṣaya tṛtiya/paraśurāma jayanti	白檀, 大麦	ブージャ
4 nirja ekādaśī bratarm/tulasi bija ropaṇam	穀物, 布, 傘, 果物, トウルシー	ブージャ, 断食 (水も禁止)
5 baiṣṇavanām hariśayani ekādaśī bratam /tulsī ropaṇam	トウルシー, ギー, 米, 大麦, ゴマ	ブージャ, 断食 (果物だけ, または水だけ)
6 śrāvaṇa samkrānti/Into phālne	果物, 線香, マース, バカウデイ, キール, とうきび	ブージャ, 煙で皮膚の痒いなが治る, キールを食べる
7 nāgapañcamī/kalki jayanti	線香, 花, ミルク, 綿, シンドゥール, 大麦, ゴマ, 米, 牛糞, 蓮の花	ブージャ
8 raksā bandhana	米, ダル, 塩, ギー, タルカリー, ウコン, 紐	ブージャ, ウコンで染めた紐を手首に結ぶ (ウコンの芳香が病をよくする)
9 kṛṣṇa janmāṣṭamī brata	花, 果物, アビール, 大麦, ゴマ, 線香, 灯明, パンチャアムリット	ブージャ, 断食 (果物はよい), パンチャアムリットを食べる
10 kuśe aumśī	クシャ草	ブージャ
11 tija/haritalikā	大麦, ゴマ, ビヤクダン, アチャエター, ココナッツ, スバリ, レモン, 季節の果物, 布, 線香, 灯明	ブージャ, 断食
12 gaṇeśa catulthī	ロッドウー, 緑の芝, 大麦, ゴマ, ウコン, 線香, アビール, シンドゥール, スバリ, 黒紐, 白い布, パンチャカピチャ, パンチャムリット	ブージャ, 10個のロッドウーを食べる
13 ṛṣi pañcamī brata	ブラシ	ブージャ, 断食
14 pratipadā śrāddha	ミルクで作ったお米の団子	ブージャ, 16日間は, 魚, 肉, たまねぎ, ニンニクを食べてはならない
15 gaṭasthāpanā/āśbina śukla pakṣa pratipadā	大麦, トウモロコシ, 刃物類	ブージャ
phūlapāti	果物, ベールの葉など, フルパティー, 供犠物 (アヒル, ニワトリ, 雄水牛, 雄山羊など), 刃物類	ブージャ
bijaya daśamī	ザマラ, ココナッツの汁	ブージャ
kojāgrata bratam	牛乳 (牛のみ) 牛乳のキール	ブージャ, 穀物を食べない
16 dhanbantari jayanti/kāgatihāra	カラス	ブージャ
laksmī pūjā dipāvālī /kukkura tihāra	タバリ, 蠟燭, イヌ, 花輪	ブージャ
gāi pūjā	ウシ, 花輪, アビール, 炒り米, 米, イネ, ヨーグルト, バナナ, ロティーなど	ブージャ
bhāi ṭikā/govarddhana pūjā	油の器, クルミ, ピンロウジュで作った花輪	ブージャ
17 harivodhani ekādaśī/tulasi bibāha	トウルシー	ブージャ, 供物を自分も食べる
18 dhānya pūrṇamā bratam	ロティー	ブージャ
19 māghe samkranti (9日は欠日)	布とゴマ	ブージャ, ゴマで作った食べ物, キルツォを食べる
20 śripañcamī/sarasvatī jayanti	本, ノート, ペンなど	ブージャ, pamcaの断食が開始される
21 mahāśivarātri	櫛, 鏡, タトゥー, ベル, 大麦, ゴマ, ビヤクダン, アチャツダ, 花, ミルク, イネ, 米, ギー	ブージャ, 食事をしない (果物や, 何も入れない紅茶やミルクは食べてもよい)
22 phāgu pūrṇamā/holi punhi	アビール, ボロ布	ブージャ
23 caitra daśaim	アヒル, ニワトリ, 水牛, ヤギ (ボカ) などの供物	ブージャ
24 rāmanavamī brata	キール	ブージャ, 断食 (果物以外は何も食べない)

表9 植物崇拜とその効用

植物名	神または儀式との関係	効用
イネ	ドゥルガー女神と関係がある	(特記なし)
ウコン	魔術的な力をもつ	熱、風邪、咳、気管支炎などとして処方。
オオムギ	クリシュナの化身	(特記なし)
カミメボウキ	ラクシュミの化身	発汗剤、鎮痛効果、肝臓障害の薬などとして処方。
キンマ	神々の好物	興奮剤、消毒剤、夜盲症の治療などとして処方。
クシャソウ	魔除け	利尿効果がある。健胃剤としても処方。赤痢、皮膚病などによい。
クルミ	ラクシュミの好物	煎じ液は特に甲状腺腫として有効。果物はリュウマチにもよい。
ゴマ	供犠祭の護摩の火に投げられる	(特記なし)
サトウキビ	縁起のよい品	催淫作用、冷やす効果、利尿効果がある。
ビャクダン	神話に登場	冷やす効果、発汗促進、消毒作用がある。
ビンロウジュ	ラクシュミやガネーシャの神象に関係する	催淫効果があり、駆虫剤、神経の強壯剤にもなる。

(3) 断食

先述したように、祭礼行事における断食は、一切のものを口にしてはならない場合、水だけは許される場合、水、果物、紅茶はよいとする食物禁忌など、儀式により異なる。その断食の程度が何を基準に決定づけられ今日に至ったのかを解明するのは困難であるが、それぞれの行事における断食の性質を検討することはできよう。例えば前項の「祭礼行事の慣行」の中で、エカダシーの断食(No. 3)は水も飲んではないが、それは信徒たちの忍耐力を高めるためであるとしている。これは、断食が修行の一形態として行われていることを示している。また、ティーズ(No. 11)ではシバとパルヴァティーの神話に基づき、女性が幸せな結婚生活を祈願し、断食をする。しかもそれをより効果的にあらしめるために、「食物を口にすると夫の寿命が縮み、さらに水を飲むと、夫の血を飲んだと同じことになる」とまでしている。さらに、リシ・パンチャミー(No. 13)では、断食をすると、月経中の不浄に関する罪が拭かれると、断食が懺悔の行為として行われる。

ところで、敬虔なヒンドゥー教徒であったマハトマ・ガンジーは、断食をしている間に、からだはさかんに排毒していると、「健康のための断食」を奨励している。また、ガンジーは肉体的効果を指摘するのみならず、「断食の効果は、肉体の活力が高められるというだけでなく、ある目的をもって断食をすれば、精神的啓発にも

なる。」と精神的効果があることも強調している⁶⁹⁾。

(4) 供犠・共食⁷⁰⁾

ダサインやチャイットラ・ダサインでは、ボカ、ニワトリ、水牛など、犠牲の儀礼的屠殺が行われる。供犠は破壊の儀礼を経ることによって、そのエネルギーを得ようとするものである。と同時に、供犠は神と人間との共食による霊的交流もしくは社会的親交の行為である。

クリシュナの誕生祭 (No. 9) では、パンチャムリット (=雌牛のミルク、ヨーグルト、ギー、蜂蜜、砂糖の5品を混ぜたもの) を供物として捧げた後、必ず信徒も食べるし、ガネーシャ・チャトゥルシー (No. 12) では、ガネーシャに21個の黒ゴマと蜂蜜で作ったロッドゥーを作りプージャをするが、最終的に1個を供物としてガネーシャに、10個をバフンに、残りの10個を自分が食べる。これらの行為はみな神と人間との共食による霊的交流であると言えよう。と同時に供物を神と共に食べること (共食) により、神の恩恵を得られることを目的とした行為と見なすことができる。

供犠のための動物の屠殺と共食は、間接的には動物性蛋白質を摂取することになる。また、上述したパンチャムリットに用いられる牛乳は、寿命が延び、力、知恵が増えるといわれているし、ヨーグルトは食欲が増したり、お腹のために大変よいとされている。さらにギーは記憶力を高め、疲れをとるなどの効用があるとしている。同様に供物として用意される、パンチャカビヤ (牛の尿にミルク、ギー、牛糞、ヨーグルトを混ぜたもの) においても、牛の尿は咳を止め、手や足の関節の痛みを治すといわれている。

以上のことから、このように儀式に必要なものや行為と、健康法に関わりのある事柄の対比は、決して偶発的なものではないという示唆が見られる。

おわりに

ヒンドゥー教の祭礼行事は、地域により慣習や儀礼に多様性がうかがえるものの、年間を通じて同じ基本的信仰のもとに慣行されている。

本稿では、ネパール催事暦に記されたヒンドゥー教の祭礼行事について、各種宗教的行為の実際の手順を明らかにするとともに、それら儀式の諸行為が、結果的に日常生活における健康保持に果たす役割について吟味・検討することを試みた。ヴィクラム暦にティティを対応させた暦に基づく祭礼行事は、毎年同一日に行われることにはならず、若干のズレが生じる。しかしそれら諸行事は月に偏りなく配置されており、年間を通じて何らかの祭礼行事が執り行われている。これに個人の意志で行う儀礼や

断食を加えれば、ヒンドゥー教徒の人たちにとっては、ほとんど毎日何らかの儀式が執り行われることになるのである。

ところで祭礼行事の中から、儀式に必要不可欠のものと健康法に関する事柄を抽出し、それらを総括して儀式形態の一部を「沐浴」、「植物崇拜」、「断食」、「供犠・共食」に大別して考察してみると、それらの諸行為は、宗教儀礼といった視点と、健康法といった両側面から、それぞれ意義のあることが本稿では明かにされた。さらに人々が信仰している宗教行事では、ただ単に儀礼が執り行われるのみならず、季節に応じた食物や植物などを儀式の中に必要不可欠なものとして取り入れている。このことは、たとえ貧困者であっても、「宗教」という枠付けの中で病気になるまい必要最低限の食物を摂取する機会を与えたり、医療としての側面をも担うことになる。また、たとえそれらが摂取するに十分ではない量であっても、効果や必要性は知識として受け継がれることになる。つまり自分たちの民族が生き延びるための集団としての健康法を、宗教儀礼の中に構築していると見ることもできよう。しかしこれらの健康方略は、意図的に宗教儀礼の中に組み込まれていったものでなければ、健康を保持するために宗教儀礼が位置づけられることになったのではなく、自然に定着していったと考えるのが適切であろう。

謝辞

本稿を執筆するにあたって、故ヒラ・カドカ氏と妻のラクシュミ・カドカ氏には、インフォーマントとして多大なるご協力を頂いた。本稿執筆中に逝去された故ヒラ・カドカ氏の冥福をお祈りするとともに、心より感謝したい。

注記

- 1) ネパール国内では、ブラーマンとチェットリを合わせた人口は、他のどの民族よりも多いとされている。両者はともに、敬虔なヒンドゥー教徒である。また、ネパールは多民族国家であるが、この地域は主にネワール族やチェットリ族が生活している。
- 2) ネパールでは通常、ヴィクラム紀元を年号とし、太陽日 (gate)、太陰日 (tithi)、西暦 (tārikh) といった3種類の暦が並行して使用されている。市販されている暦は、太陽暦を基本にし、太陽月ごとに1枚になっており、それぞれの日に対応する太陰月の日付と、西暦の日付が記されている。
 ヴィクラム紀元とは、古代インド史において、ウッジャインーを統治していた Vikramāditya 王が、シャカ族に勝利した記念の紀元といわれている。西暦前58年を紀元とする（『インド神話伝説辞典』、東京堂出版、1994、p 77）。
 太陽暦ではひと月の長さが29日であったり、30日であったり、31日であったり、ときには28日しかなかったり、32日の長さになったりする。これは真太陽が12宮のそれぞれに実際に位置する期間を一太陽月とするためである（『占星術師たちのインド』中公新書、1992、p 65）。

太陰日 (tithi) は、月の満ち欠けの周期である朔望月を30等分した時間単位で、インドの祭式や占いにとって欠くことのできないインド暦独特の時間単位である (『占星術師たちのインド』中公新書、1992、p51)。

祭礼の日取りは、大部分が太陰暦 (tithi) で決まるが、人々はその太陰暦 (tithi) に対応する太陽暦に基づき供儀を執り行う。したがって太陽暦では毎年、祭りの月日が若干ずれることになるが、そのことに対し、信徒はなんら違和感を持っていない。

- 3) 黄道帯を、春分点を起点として30度ずつ12等分してつけた名称。黄道の移行は、占星術とのつながりが強いヒンドゥー教では重要視されている。
- 4) nava=新しい、barṣa=年、meṣa=雄羊、baiśākha=ヴィクラム暦の4月、sagrānti=太陽の他の宮への移行。
- 5) āmāko=母の、mukha=顔を、herne=見る、aumsī=新月。pakṣaとは、半分あるいは部分という意味で、kr̥ṣṇa (黒) と śukla (白) とがあり、月の状態を示す。白分とは、新月 (朔日) からだんだんと明るい部分が広がって、満月になるまでの15日をいう。黒分とは、16日目よりしだいに暗くなって闇夜 (晦日) になるまでの15日をいう。ただし、1朔望月は実際には約29.53日であり、太陽日と太陰日の長さも違うので、陰暦の日付には欠日や閏日がしばしば見られる。kr̥ṣṇapakṣaとは、黒分月を意味することになる。
- 6) カースト制度の最上級である僧侶階級に位置づけられている人のこと。ブラーマンのことをネパール語では、バフンという。
- 7) tulasiko=トゥルシーの、viu=種、ropane=植え、ekādaśi=エカダシー、新月または満月から数えて11日目。
- 8) カミメボウキのことをサンスクリット語でトゥルシーという。この植物は記録に上がらない遠い昔からヒンドゥーの人々によって祭られており、ヒンドゥーのもっとも神聖な植物の一つとなっている。
- 9) ヴィシュヌ神はブラフマー、シバとともに、3神の一つ。生類救済のための10種の形をとって世に現れるといわれている他、植物や穀物にも化身としてたとえられることが多い。
- 10) プージャとは、ヒンドゥー教の主要な拝礼形式のことをいう。神前で祈りの言葉が捧げられ、花や食物が供えられる。
- 11) 神格化された蛇で、降雨や水に関係がある。ヒンドゥー教では、頬をふくらませたコブラの姿で、しかも多頭で表現される場合が多い。
- 12) ブラーマン・クシャトリヤ・バイシャの3カーストに属する男子だけが、聖紐を身につける対象となる。何本かのより糸をいっしょによりあわせた長い紐の輪を、左肩から右脇下にかける。通常8~11歳の奇数の歳に儀礼が行われ、その日から一生身につけることになるが、近年では儀式は行っても、実際には身につけていない人も少なくない。この儀式は第2の誕生と考えられている。
- 13) ティハールについては、「祭礼行事の慣行」のNo. 16に詳述する。
- 14) 「山の娘」あるいは「山に住む女神」の意。シバ神妃の名は多数あるが、このパルバティーは最も有名で、広く崇拜されている女神の一つである。
- 15) ブラフマー、ヴィシュヌ神とともに3神の一つ。破壊と創造をつかさどる神で、生殖器崇拜とも関係が深い。ルーダラ、マヘース、マハデブなど多くの別名をもつ。マハデブのマハは偉大なる、デブには神の意味がある。
- 16) gaṇeśa=ガネーシャ。ガネーシャは象頭人身をした知恵と繁栄の神で、シバ神とその神妃パルバティーとの間に生まれた息子とされている。
- 17) 球形菓子のこと。
- 18) 月経中には日常生活において、様々な制約を受けることになる。例えば、5日間毎朝沐浴をしなければならぬし、プージャや神に関わるすべてのものに触れてはならない。また、料理をすることはもちろん、家族の者と食事を共にしてはならず、隔離されたところで食べる習慣がある。
- 19) 黄金時代とは、ブラーナの4つの時代の最初で最良の時代のことである。
- 20) No. 15のデザインについては、次項の「祭礼行事の慣行」のところで一括して詳述する。
- 21) No. 16のティハールについては、次項の「祭礼行事の慣行」のところで一括して詳述する。

- 22) 末期の水として、トゥルシーに浸された水を口に含ませると天国へ行けるといわれている。
- 23) No. 5 参照。
- 24) ブラフマー神の妻。学問、知恵、弁説、音楽の神とされている。ネパールの学校には、サラスヴァティー神を校内の敷地に祀っているところが多い。
- 25) ヒンドゥー教の4つの主なラトリー（夜祭り）に、モハラトリー、カールラトリー、スカラトリーそしてシバラトリーがある。
- 26) タトゥウの辞書的な意味は、「实在；真実、要素；5大素（地水火風空）；精髓；最高神；諦（数論哲学における25諦の一つ）。」である。
- 27) ネパールの地形は北海道の約2倍の面積を有しており、東西約850 km に対して南北わずか200 km と地図上では横に細長い。しかし北部は標高3000 m から8000 m 級の山々が巨峰を連れ、帯状にヒマラヤ地帯を形成している。また南部は標高300 m 以下の‘タライ’と呼ばれる、同じく帯状に連なる南部低湿地帯が、遠くヒンドスタン平原へと続いている。そして両者の中間が山岳地帯となっている。
- 28) 赤いマイカの粉のこと。
- 29) ダサイン大祭については、次項「祭礼行事の慣行」のNo. 15に詳述する。
- 30) ドゥルガーとは、「近づきたい女神」の意である。シバ神の神妃で、悪魔退治の女神であると同時に、豊穡をもたらし、犠牲を要求する大女神とされている。
- 31) インドの叙事詩「ラーマーヤナ」の主人公。
- 32) これらはすべてガンガーに通じている。ここでいうガンガーとは、インドのガンジス河のことであるが、ネパールでは、その河に通じる支流をすべてカンガーとみなし、そこを流れている水は聖なる水とされている。
- 33) 豆。ひき豆汁。
- 34) 精製バター。
- 35) 注32参照。
- 36) 額につける印。通常は赤い粉に聖水の混ざったものが多いが（粉だけだと額につかないため）、サラドゥ（先祖供養）の時は黄色い粉、ティハールの時は大麦を水で溶かしたものを縦に塗り、その上にゴマ・ビャクダンを擦りつぶしたものといろいろな色（黄、緑、赤、青、ピンクなど）の粉を少しずつつけたりと、その時々によってつけ方が異なる。また既婚女性は市販されている赤いティカを額につける場合が多いが、未亡人になるとつけなくなる。この場合は、ビャクダンを擦ったものをティカとして額につける。
- 37) 辰しん砂の粉。朱色をしており、既婚女性が髪の分け目につける。結婚式では、このシンドゥルーを新婦につける儀式が最も重要であると言われている。
- 38) 今日では、この日のために市販された「ナグの紙」を用いる家が多い。
- 39) クシャ草の指輪は、神や祖先への儀式や何か特別な儀式を司る男の右手の薬指にはめられる。
- 40) 男根の象徴で、先史時代からの男根崇拜がシバ信仰と結びついたものとされている。シバ寺院では、女性器ヨーニと結合した形の神体が祀られている。リングの先端は必ず北の方角をさしている。
- 41) キンマ。キンマは天国にはないので、神々や女神たちも、このキンマを欲していると言われている。嗜好品として、キンマの葉に石灰、香辛料を入れて三角形に包んだものが売られている。
- 42) ピンロウジュの実。ガネーシャの像やラクシュミーの像が、ピンロウジュに象徴される。
- 43) ダッチオンという木を使用する。
- 44) ヴェーダの聖典には、リグ・ヴェーダ、ヤジュル・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダ、アタルヴァ・ヴェーダの4つがある。ヴェーダは知恵を意味する。
- 45) ここでいう沐浴は、アンニャングスナーナというもので、これは身体に香油を塗ったり、油を塗ってマッサージをすることである。寒いとき、体を油でマッサージし、沐浴をしなければならぬ。油をつけずに沐浴をすると体が冷えて病気になる。このように沐浴をすると、体が健康で丈夫になるとされている。
- 46) ザマラは Vijaya Dasami の儀式には必要不可欠なもので、大麦が芽を出した状態をいう。

このザマラとなるムナまたはトゥサ（はえたばかりのものを、ムナまたはトゥサと言う）は、信徒を幸福にしてくれる。それ故、プージャには大麦を使用した。

- 47) 注30参照。
- 48) 2052年の場合は、欠日となっている。
- 49) 去勢していない雄ヤギのこと。供犠はシバ寺院では行われぬ。
- 50) 村では家に自分たちの壺を作っている。そして都市でも自分たちの場所に、ダサイン用の家、または壺を作っている。
- 51) シバの神妃でドゥルガー神の激怒から生み出された。したがってドゥルガーの分身にあたる。「暗黒の女神」とも言われる。
- 52) ヴィシュヌ神の妻で、幸運と美の女神とされている。ディーワラーの3日目（No.16参照）に、盛大にまつられる。
- 53) 1年のうち、モハラトリー、スカラトリー、シヴァラトリー、そしてカールラトリーを、4つの重要な夜としている。
- 54) インドラ神は武人階級の神で、人々を苦しめる悪魔を徹底的に撃破する英雄神である。インドラ神の起源は古く、紀元前14世紀のヒッタイト文献の中に、すでに認められている。
- 55) ティハールは通常5日間の祭りであるが、2052年の場合は、kukuratihāra と laksmī pūā、govardhana pūjā と bhāi tīkā が同一日になっているため、暦上は4日間となる。kāga=カラス。
- 56) kukura=イヌ。この場合は雄雌を問わない。
- 57) ヤムラーズは、閻魔界の王のことである。ヒンドゥー教では全部で14個の界があるが、閻魔界は宇宙にあるとされている。そうして死後魂を運ぶのが、ヤムラーズの使者であるイヌとされている。
- 58) シャールの樹の葉で作った小皿または器。
- 59) gāi=牛。
- 60) 牛の糞と石灰で家を塗る。そうすると、いろいろな種類の虫や細菌がいなくなると言われている。
- 61) ヒンドゥー經典によると、地球を支配している方角の中で北の方に王がおり、それは大変な金持ちであった。そしてそれはイネの王とされていた。それ故ラクシュミプージャの日、ラクシュミの神像や写真を北の方に置き、プージャをする。つまり祭壇は北側に向かって作られる。
- 62) bhāi=弟。ここでいうバイティカ (bhāi tīkā) は、姉妹が 兄弟にティカをつける儀式のことで弟に限らない。この儀式は、ヒンドゥー教では最も重要な儀式の一つとされている。
- 63) No. 14参照
- 64) 竹などで編んだ穀物を貯蔵しておく容器。村では、このような方法で穀物を貯蔵する。
- 65) 米、マス（いんげん豆の一種）を砕いたもの、ギー、しょうが、マサラ（香辛料）を入れて焚いた食べ物。
- 66) 3時間を1パヘルとする。夕刻太陽が沈んだ後、パヘルの時間の計算、または数えのときとなる。
- 67) サンザシの実（一種の苗のような花を食べた後酔う）。シバ神は麻薬を好む。
- 68) ここでは広義に、穀物、果実もこの範疇に含める。
- 69) M. K. Gandhi 著、丸山博監修、岡美三子訳『ガンジーの健康論』編集工房ノア、p. 177、1992。
- 70) 広義の供犠には動物供犠のみでなく、飲食物（とれたての穀物、果実、酒など）や物品（毛髪、衣服など）なども含まれる。（『文化人類学事典』弘文堂、1992）したがって、ここでは供犠を広義の意味として捉えている。

参考文献

- 太田雅男発行『ヒンドゥー教の本』学習研究社、1995。
 コッラニ編集部「インドの人と文化<インドのお祭り特集>」『コッラニ』13号、コッラニ編集部発行、1989。
- 葵丈夫『インド曼陀羅大陸』新紀元社、1991。
 斎藤昭俊『インドの民俗宗教』吉川弘文館、1984。
 James George Frazer 著、内田昭一郎、吉岡晃子訳『図説金枝篇』東京書籍、1995。
 菅沼晃編『インド神話伝説辞典』東京堂出版、1994。
 Trilok Chandra Majupuria 著、西岡直樹訳『ネパール・インドの聖なる植物』八坂書房、1993。
- Madhu Bazaz Wangu 著、山口泰司訳『ヒンドゥー教』青土社、1996。
 Mahatoma Kkaramcyando Gandhi 著、丸山博監修、岡美三子訳『ガンジーの健康論』編集工房ノア、1992。
- 長谷川明『インド神話入門』新潮社、1989。
 パトリシア=バーリ著、長柄行光訳『ヒンドゥー教の世界』帝国書院、1988。
 矢野道雄『占星術師たちのインド』中公公論社、1992。
- bābū mādhavaprasāda śarmā : bārṣika-bartalatṛāvali, sāgara mudraṇa.
 Dharam Vir Singh : HINDUISM AN INTRODUCTION, Travel Wheels, 1994.
 hirā khāḍka : Nepalko cāḍa, 2052. (unpublished)
 hitaiṣi kampani : ṭhūlo śri svasthāni bartakathā, hitaiṣi kampani, 2045.
 Kesar Lall : Nepalese Customs and Manners, Ratna Pustak Bhandar, 1990.
 Michael Allen : ANTHROPOLOGY OF NEPAL, Mandala book point, 1994.
 Om Lata Bahadur : The Book of Hindu Festivals and Ceremonies, UBS Publishers' Distributors Ltd., 1995.
- puṇyartna bajarācārya : hāmro cāḍa-parva, ratna pustaka bhaṇḍāra, 2043.
 rādhākṛṣṇa śrīmāli : gaṇeśa upāsanā, ḍāyamaṇḍa pākeṭa buksa.
 rāmāvatāra gupya : gaṇeśa-mahimā, pustaka mahala, 1994.
 rāmlagna pāṇḍeya : śri śivamahāpurāṇa, dāmbe mudra presa, 1988.
 samara bahādura malla : nepāli khāḍha kandamūlagarū, vana mantrālaya, 2038.
 Samar Bahadur Malla : Wild Edible Plants, Ministry of Forests & Soil Conservation, 1982.
 S. H. Shrestha 'NEPAL IN MAPS' EDUCATIONAL ENTERPRISE PVT. LTD. 1988.

(1996年4月30日受理)